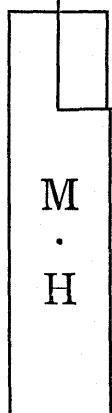


「非知」と「非力」に希望を見る



新しい時代の希望は、子どもと老人の「非知」と「非力」にあるというなら、それは余りにも逆説に過ぎるだろうか。しかし、競い合うことでしか「ちえ」と「力」を発見し得ぬ不幸な時代にあって、「非知」と「非力」は特有の光彩を放ちながら、私どもの前に新しい望みの灯を掲げてみせて いるよう に思 う。横行する現実知や現存する力を、批判するのではなく、ましてや否定などせず、ただし、さわやかに無縁であること……。あるいは、そのいずれをも無化して彼らしくあること……。いま、「子ども」に、救済の望みが託されたら、

それは、彼らがよき可能性の体現者だからでも、未来をになつてくれるからでもなく、「非知」と「非力」を生きることの出来る特有の存在者であることのゆえではないか。人間が打ち立てた価値の体系は、その中心に「ちえ」と「力」を置いて いるのだが、それに未だ所属しないもの、あるいはそれらから身を逸らしたものだけが、そうした体系を相対化し、無化することが可能である。そして、それら存在者は、「子ども」と「老人」に他ならない。彼らのありように、硬直化した現代から脱却する新しい道が見出されるとするには、この所以なの

だ。

ミヒヤエル・エンデは、昨春上映された映画『ネバーエンディング・ストーリー』によって、一躍話題的となつた作家であるが、一九七〇年代から、『モモ』といふ作品の邦訳によつて、一部の知識人からは熱いまなざしを注がれていた。そして、映画の原作『はてしない物語』は、広く世界の若ものたちに愛読され、聖典視されさせていると言う。日常的現実の裏側にあつて、私どもの世界を支えるもう一つの現実「ファンタージェン」、そこが虚無に侵され、滅亡に瀕しているとの設定で、物語の幕は切つて落とされ、ファンタージェンを救済すべく、二人の少年が活躍する。一人は、ファンタージェンの住民、緑の肌族の少年アトレユであり、いま一人は、人間の少年バスクアンである。二人に襲いかかる危機の数々とめくるめく冒険……。結果として、ファンタージェンの滅亡はとりあえずは回避され、主人公の少年も「死と再生」の旅を終えて現実世界に戻つてくるという

形で、長い長い物語は幕を下ろすのだ。ファンタージュの滅亡は、人間世界をも枯渇させるという設定であるから、人間世界も、一応はよみがえりの機会を与えられたのであつた。

この物語は、発表と同時に多くの論評を集め、さらなるエッシャーのだまし絵のようなその構造や、「虚無」や「幻想」にかかるメッセージ、あるいは、ちりばめられた多彩な寓意など、様々な視点から作品論が展開されて今日に至つてゐる。子どもの本の体裁をとつてはいるが、頁数五八九、定価二八〇〇円の大部の書物が次々と版を重ねてゐるのは、読者が子どもではなく、読書力に秀でた大人たちであることの証でもあろうか。作者自身が「マルヘン・ロマン」と定義するこの作品は、児童文学の形を借りることで、現代の様々な問題を、最もシヤープに掬い取つて見せてゐると言えよう。

ところで、私は、この作品の不可思議な中心、「幼ご

ころの君」と呼ばれるファンタージェンの女王に焦点を当てて先ず、その意味を読み碎いておこうと思うのだ。

幼ごころの君は、先の二人の主人公、アトレーユとバスタンの背後にあって彼らを生かし、彼らにその使命を遂行させる非行動的な中心であった。というのは、ファンタージェンに虚無が蔓延し、滅亡の不安に脅かされているのは、この女王が病気で日一日と衰弱していくからであり、ファンタージェンを救おうとするなら、女王の病気を直す方法を見出さなければならないのである。アトレーユらが冒険の旅に出ていったのはこの女王のためであつたし、また、数々の危険をくぐり抜けることが出来たのも、女王から託された「アウリン」と呼ばれる女王のしるしのおかげであった。従つて、行動したのは二人の少年なのだが、その行動を促したのはこの女王だったのである。幼ごころの君こそは、ひつそりと裏側に隠れた、ただし、物語全体の要としてその展開を促す、真の主人公と言えるかも知れない。

幼ごころの君は、病身の、消え入りそうにたおやかな

一人の少女であった。作者エンデの筆を借りれば、彼女は、次のように形容されている。

「幼ごころの君は花の円蓋の中で、丸く、ふんわりしたクッションの上にすわり、さらにいくつものクッションに身をもたせかけてアトレーユに目を向けていた。この上もなくたおやかな、尊い宝のようだった。顔はすきとおるほど蒼白く、病がいかに重いかを思わせた。アーモンド型の両の目は濃い金色で、心配や不安の影は露ほども見られず、につこりとほほ笑んでいた。きやしゃで小柄な体は、もくれんの花びらの白さもくすんで見えるほどの純白に輝くゆつたりとした絹の服に包まれていた。見たところせいぜい十才くらいの、いうにいわれず美しい少女のようだったが、きれいにくしけずられ肩から背へと波うちながらクッションにまで届く長い髪は、雪のようにならかだった。」

こんな弱々しい少女が、ファンタージェンの統治者であり、しかも、ファンタージェンの存亡は、人間界のそれと不可分の関係にあるということであれば、究極的に

は人間界の統治者でもあるのかも知れない。そして、その統治のしかたは、歴史上のあらゆる王や女王、さらに物語世界の王様や女王様のイメージをくつがえす、全く異ったありようで描き出されていた。すなわち、彼女は、王座にありながらも支配者ではなく、中心でありつつも権力を行使せず、命令せず、裁かず、攻めることも守ることもなかつた。にもかかわらず、「すべての生きもの、善なるものも悪なるものも、美しいものも醜いもの、おどけものもまじめなものも、おろかなものも賢いものも、すべてみな、この幼ごころの君が存在してこそ命だった。この君なしには、何一つ存在しえないのでない」のである。

ファンタジエンでは、すべてのものが、表と裏、光と影のように一対をなして出現していた。アトレーニとバスチアンの組み合わせも例外ではない。召命を受けた者の潔さにすがすがしく輝く妖精少年アトレーニと、ぐずで不健康で学校嫌いの、落ちこぼれ少年バスチアン：

…しかも、この二人は、それぞれにお互いがお互いで分身としていて、両者は不可分にその生を共有している。どちらがよいとか、どちらが正しいとかいうのではなく、どちらもそれぞれに存在せねばならないのである。この国では、幼ごころの君の下に、善と悪、美と醜、賢と愚などの組み合わせが、二元論的対立ではなく、不可分の対として存在し、対立に依拠する価値体系と序列が、徹底して無化されていた。存在は、すべて存在するがゆえに肯定されて受容され、あるがままに生かされている。そして、その中心にあって密やかに息づくのが、この病身の女王であった。徹底して「力」を振るうことのない、というより、振るうべき「力」を持たない弱々しい少女の統治者……。世界が、対立と序列化から逃れるためには、「非知」と「非力」に依る以外に道はないということだろうか。この女王が「幼ごころの君」と呼ばれるのは、恐らくは、「非知」の象徴であるうし、華奢で病氣の身体を与えられているのは、「非力」の表現に他なるまい。この君は、「救い」にかかる固定観

念を退け、「統合」にまつわる既成概念を無化しつつ、

「救世主」そして「統治者」のイメージを、全く新しく

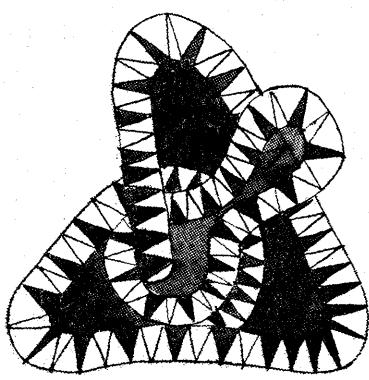
描き変えて見せて いるのだ。

くぐる場面がそれであった。

すなわち、第一の門は、「大いなる謎の門」と呼ばれてスフィンクスによつて見張られている。スフィンクスの眼光は、それに触れたものを石化させる鋭さに輝き、

容易にそこを通り抜けることを許さない。時にスフィンクスが目を閉じて、通過を許すことがあるとされているが、それがどんな時なのか、どのような理由によるものか、誰にもわかつてはいない。従つて、どうすれば第一の門をくぐることが出来るのか、果たして無事に帰つて

「非知」と「非力」による救済のメッセージは、作品の随所にくり返され、主人公たちは、ちえと力を捨てることによつて新しい道にふみ出すを得る。たとえば、アトレーユが、ウユララの予言を聞くべく、三つの門を



くることが出来るのか否か、アトレーユには何一つわかつてはいないのである。

彼はとにかく第一の門に近づき、スフィンクスを見上げる。そして、彼は息を呑んで立ち止まるのだ。何故なら、それは余りにも偉大であり、謎に満ちていて、神秘の光に輝いていた。美が怖ろしいものもあり、怖るべきものが美でもあるという、この戦慄に満ちた発見…。

想像を絶するまでに壮大で、絶大な力を持ったものの実在への怖れに、彼は頭を垂れ、打ちのめされて、ただ、一步一歩、足を進める以外にすべもない。通過が許されるか、自分の一生がここで終るのか、自分の力では如何ともし難いその歩みの果てを、大いなるものに委ねて、ひたすらに進んだとき、いつか門は彼を受け入れ、スフィンクスは彼を通しててくれたのだった。

第二の門は、「魔法の鐘の門」だった。そこに映つた思いがけない姿、それは、アトレーユのまだ見たことがない人間の少年バスチアンだったが、彼は疑うこともせず、ためらいもなく、その未知の映像を自分として受け

入れる。どんな見慣れぬ姿であつても、自分の前の鏡に出現したのは、自分以外の何ものでもあり得ないと素直にそれを肯定したとき、門は彼を受け入れ、そこを通り抜けることが出来た。

「鍵なしの門」と呼ばれる第三の門にたどりついた時は、生まれたばかりの子どものように、一切のちえと力から解放されていたアトレーユは、自分が何のために旅しているのか、どうしてここにいるのかさえ考えることなく、ただひたすらに晴れやかな気分で、軽々と笑っていた。取手も握りも鍵穴もないその門を、アトレーユは、左にかがみ右に近よっては眺め楽しみ、そつと近づいて撫でてみた。あかがね色にきらめくその光を、美しいと思いつつ、しばらくじつっているうち、門はするりと開いて彼を導き入れてくれた。

こうして、彼は三つの閨門を突破し、目的を達することが出来たのだが、そのいずれの場合も、ちえや分別、自分自身の判断し意志する心、惑う心などを放棄し、己れを開き、大いなるものに委ねたことの所産であった。

ユエララの予言は、遠くから漂つてくる歌声としてアトレーの耳に訪れた。それは、澄んだ子どものような声ながら、深い悲しみをたたえていて、彼の魂にしみ通り、救済を約束してくれたのである。



従来の秩序社会は、二元論的対立の一方に正の値を与える、他を負と貶しめることで価値の体系を作り出し、それによってすべてを整除してきた。すなわち、善を正しいとして悪を駆逐し、美を位置づけるべく醜をさげすみ、賢に道を開くために悪を排除するという、こうした整除のしかたである。しかし、こうした秩序体系の結果したものは、「やえ」と「力」を駆使した他者の否定に他ならなかつたのではないか。

善といい、美というも、所詮相対的でしかあり得ぬものを絶対とみなすことで作り出される絶対の差別……。その結果としての抑圧……。正の位置を獲得するための絶えざる競争……。私たちがこうしたありようから自由

になろうと願うなら、その道は、この体系の外にしか見出されないだろう。従来の負の値を逆転させて正の位置につかせたところで、所詮、それは、いずれまた逆転される束の間の勝者に他ならず、同じ構図の入れ替えに過ぎない。二元的対立のいずれか一方を正とする、この構図そのものを無化するためには、何ものをも否定せず、いずれの優劣をも裁かない、徹底した「非知」と「非力」にこそ救いがあるのでないか。

このとき、私どもの眼は、秩序の外に溢れ出し、「非知」と「非力」に浮遊し得る子どもや老人の上に、新しい光を見て、それに望みを託すのである。